

古

典落語の舞台は、明治か江戸時代が多い。言わば時代劇である。こども落語では緻密な演出が求められるような演目は避けるので、時代考証はほとんど無視している。小道具大道具を使わないのいいことに、しゃべっているこどもたちがどんなイメージを浮かべているのかにはあまり注意を払わない。昔の外国映画に出てくる日本のように、制作者の知っている知識が断片的に配置された、知っている者からすれば少々気色の悪いイメージが描かれているのかもしれない。

嘶を覚えたら仕方（しかた）と呼ばれる動きをつけていくのだが、ぼくには落語の型の素養も知識もないし、こども落語には不要だと思っているので、こどもたちには想像したとおりに動けばいいと言っている。言葉に即しているのだから、さほど出鱈目になることはなく、こどもたちが考えてきた動きを客席からわかりやすいように修正すれば、まず違和感はない。

言葉と動きがちぐはぐなときは、こどもの中に像が結ばれていないのだとわかる。読み込みが足りないのが原因なら、次は理解しているかもしれないからほ

うっておく。知識が足りない場合は補う。どうも妙だぞと思って話しているうちに草鞋がどんなものか知らなかったという事実に行き着いたこともある。

ある教室生が、嘶は全部覚えて所作も事細かくつけているのにどうもやりにくそうにしていた。ところどころ集中を欠き、どこかイライラしているように見えるのだ。ぼくにはさっぱり理由がわからず、どう言葉をおかけたものか困ってしまつた。一度きりならともかく毎回同じ調子だと、うまく対処できていないこちら側の問題である。

これも話を聞いているうちに原因がわかつた。この子はご隠居さんがイメージできなかったのである。話の流れから人物像や役割については理解しているのだが、隠居という存在がピンと来ないのだ。それに思い至つたとき、現代生活で「ご隠居さん」はもう存在しないのだという事実にはハツとした。家督を次世代に譲つて人生双六のゴールに達し、何をすることもなく、若い者が知恵を借りに来れば相談に乗つてやる。それも真面目だったり不真面目だったり。浮世の世知辛さを脱した人物をどう説明したものか。難問である。

2026.3.2

1528号(夕焼け通信 創刊1993.4.23)

〒690-0871 島根県松江市東奥谷町386-7 gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/ 編集 宮森健次

木幡智恵美

72

古い古いに

や

りたいこと第一位の北海道旅行から戻ると、これまでに書きためたものを冊子にまとめた。畑には週に二度通つて収穫もするようになり、やりたかつたことを次々とこなしていく。思わぬ絵本作りに関わつたことから、通信講座で挿絵ライターのコースも試すようになったし、ついでに短歌の通信講座も受講した。週一回の点訳講習会では頭が痛くなつたけど、これまでできなかったことが目いっぱいできる喜びを感じる毎日になった。

そうして迎えた秋、娘の身体に異変が起きた。紹介してくれた医院の先生がこれまでの経歴からか検査に回すと、良くない結果が出たようだ。医院から親と一緒に来るようにと娘に連絡が入る。先に私が呼ばれ、「娘さんにどう伝えましょうか」と先生に尋ねられた時は、相当深刻なのだと思つた。おらずと先生の前に座り、こう答えた。「こうして呼ばれたこと自体、娘には感じているものがあるようです。それに本人は医療従事者ですから、いざれ分かると思ひますので、ありのままを話してください」。娘と交代した後、再度私も呼ばれ、カレンダーを見ながら治療計画を説明された。当時、娘は二十五歳、若いのであるべく早く悪いところと周囲をこっそり切除する必要性に迫られていたのだ。日記の最後に、英語でなく日本語でその間の経緯が事細かく記されている。それを讀むと、あの頃のどきどきが蘇つて来た。

入院した娘に付き添つた期間は、何憚ることなく傍に居られた。五歳で入院した際は、朝が来ると義母と交代して仕事に向かい、時間休をとつて帰り朝まで病院で過ごす毎日だった。でも、この時は居られるかぎり、傍らで痛いところをさすつたり、車椅子に乗せて運んだり、洗髪してやつたりできた。このために早く辞めるよう天が命じたのではとも思つた。

大変な思いをした娘であつたが、患者の立場に立つて医療従事者のありようを学ぶ機会にもなつたようだ。相当な痛みだつたようだし、再発の不安もあつたらうに、明るく振舞う娘には救われた。心にも身体にも大きな傷を負いながらも、仕事に復帰し、今では三児の母だ。あれから二十年近く経ち、仕事に子育てに奔走している娘の姿に安堵するとともに、目に見えぬ何かの力に感謝している。

30代フリーター 高市早苗は施政方針演説で「世界を見渡せば、政府が一步前に出て、官民が手を取り合って大規模かつ長期的な財政支出を伴う産業政策を展開している」と語った。産業政策で後れを取っている日本は、先を行くアメリカや中国に追いつかなければならないというかけ声だ。キャッチアップは昔から日本人が得意としてきたので、もしかしたら日本経済はかつての高度経済成長期のように向上きになるかもしれない。

年金生活者 「官民が手を取り合って大規模かつ長期的な財政支出を伴う産業政策を展開」することは、次の段階に向かおうとする資本主義の要請だ。その現実をいち早く受け入れ、次の段階の資本主義が必要とする新たなインフラを構築するために、AI・半導体、量子技術、航空・宇宙、バイオなど最先端分野の研究開発、投資を促す産業政策を世界の先頭を切って推し進めているのがアメリカと中国だ。

これまでのグローバリゼーションの高度経済成長時代の社会党、共産党、新左翼のような振る舞い方を再びすれば、国民の大多数から見放されるだろうということだ。

当時のこれらの政党、諸党派は、今の国民が嫌う「上から目線」を常用していた。見かけはそうではなくても、その源流は知識人の前衛党が大眾を導くというレーニンの考え方にさかのぼる。社会主義なら社会主義というイデオロギーを身に着けた知識人が、それを労働者や農民に説き、啓蒙するという考え方だ。

中道改革連合にもその残滓があった。「中道」の理念は、右・左・中間というイデオロギーの物差しで政治をとらえたものだ。それは右でも左でもない「中道」こそが正しいのだという「上から目線」をともなっていた。それがこの党を惨敗させた要因のひとつだ。

現在の国民は高度経済成長時代の国民とは違う。貧困を脱し、当時より高い生活水準を手にしており、それに相

時代は、世界中からかき集められる安い労働力と、地球規模の競争が強い技術とビジネスモデルのイノベーションが利潤の主要な源泉だった。各国政府は国境の壁を低くして労働力の移動をしやすくし、経済への介入をできるだけ控えることで競争によるイノベーションを促した。昔から模倣は巧みでも創造は苦手の日本はその間、得意技を発揮できず、「失われた30年」を余儀なくされた。

そのグローバリゼーションが格差の拡大や金融危機、移民の増加で行き詰まった。各国は国境の壁を再び高くし始め、経済への介入を強めた。「ネオ重商主義」と呼ばれるこの路線は高度経済成長の時代の日本政府がとった政策に似ている。その時代がこれから先、形を変えて反復される可能性がある。それは左派・リベラル派が息を吹き返す可能性のある時代でもある。

30代 衆院選での中道改革連合、共産党、れいわ新選組、社民党の惨敗ぶりを見ると、とてもそんな感じがしない。時代は、世界中からかき集められる安い労働力と、地球規模の競争が強い技術とビジネスモデルのイノベーションが利潤の主要な源泉だった。各国政府は国境の壁を低くして労働力の移動をしやすくし、経済への介入をできるだけ控えることで競争によるイノベーションを促した。昔から模倣は巧みでも創造は苦手の日本はその間、得意技を発揮できず、「失われた30年」を余儀なくされた。

30代 高市のほうこそ右派イデオロギーの塊のように見えるが。年金 高市は「日本列島を、強く豊かに」という富国強兵のイデオロギーを持ちながら、国民にはそれに従えとは言わずに、自分が「働いて働いて働いて働いて働いて」と実現すると訴え、

い。

年金 社会党、共産党、新左翼に勢いがあったのは高度経済成長の時代だ。60年安保闘争があり、革新自治体が誕生し、全共闘の大学占拠があった。

左派・リベラル派の行動原理は再分配を重視する「大きな政府」路線だ。再分配の拡大には絶え間ない税収の伸びが必須の条件となる。それが可能になるのは、右肩上がりの成長が続くときだ。

日本の高度経済成長時代には、増え続ける税収を使って、社会保障の拡充や公害の防止、差別の解消などを進めることができた。そのとき、しぶる政府や自民党を突き上げ続けたのが左派・リベラル派だった。それがなければ、日本の福祉はここまで進まなかっただろう。

30代 では、もし日本が新たな成長の時代に入り、富の再分配の拡大の余地が広がったとして、そのとき左派・リベラル派は何ができるだろう。年金 少なくとも言えることは、かつて

「高市早苗が、内閣総理大臣で良いのかどうか、今、主権者たる国民の皆様が決めていただく」と衆院の解散理由を語った。彼女は「上から目線」がタブーであることをよく承知していた。

左派・リベラル派にとって、焼け野原に放り出されたような衆院選の惨敗は、持病の「上から目線」を捨て去るまたとないチャンスと言える。彼らの掲げる「多様性」「個人の尊重」「自由」といった理念は本来「上から目線」とは対極にあるはずだが、それをイデオロギーとして説き始めたときに、「目線」は「上から」へと反転する。

新たな成長の時代が始まれば、富の再分配の拡大を土台に「多様性」「個人の尊重」「自由」を広げることが可能になる。そのときに左派・リベラル派がしなければならぬことは、それらの理念を説いて回ることではなく、自らが「働いて働いて働いて働いて働いて」その実現に力を惜しまないことだ。

ニュース日記 1005
中村 礼治

左派・リベラル派 の前途